経済学の方法

—高橋順三郎氏の拙著『資本論の方法』批判に答える—

松石　勝彦*

要　　約

経済学の方法は他の社会科学や自然科学の方法と同じである。まず，複雑な現実を分析し，いろいろな諸要素に分解し，これらの諸要素の間の内的関連を探求し，位置づけ（下降分析，研究の方法），次により単純なより抽象的なものからより複雑なより具体的なものへと上昇し，複雑な現実を再生産する（叙述の方法）。このことを『資本論』に即して明らかにしたのが，拙著『資本論の方法』青木書店，1987年である。本書について高橋順三郎氏が5本の論文で詳細且つ執拗に検討され，批判された。この中には経済学の方法の根幹に係わる重要問題や私が意識的にアンチテーゼを出し批判した通説的見解が含まれるので，本稿では氏の批判の批判を試み，同時に積極的解明をも行う。具体的には，第一に，私の上昇法を否定され（本稿注(4)記載の氏の最近稿では不十分だとされ），工業における産業資本の生産部面を中心に経済学の篇別構成を説くべきという氏の積極説では篇別構成は全然説けず，やはり上昇法が不可欠なことを明らかにする。第二に，私の下降分析批判に対しては資本の流通過程や総過程に関する氏の見解に問題があると反論する。第三に，私が弁証法的方法を「発生，存在，発展，死滅」と説いたのは資本主義全体に関してだけであり，商品，貨幣，資本などの範疇は「発生・発展・移行」であり，この点に氏の誤解があると反批判する。第四に，私の冒頭商品＝資本主義商品説に対する氏の反論は歴史的な過去の単純商品を含む商品一般説であるが，資本主義的社会の富の要素形態である商品（例えば，店頭の電化製品デジカメ）を分析するのだから，歴史的な単純商品が入り込む余地はなく，最初に全てを説くことは不可能であるから，現実には資本主義的商品だけれども，さしあたり資本主義的商品から「資本主義的」を捨象し，論理的だが実在的な単純商品を抽出し，分析し，順次この「資本主義的」を明らかにするのだと反批判する。

はしがき

スチュワート，スミス，リカード，J.S.ミル，J.ミル，マルクス，ワルラス，メンガー，ジェヴォンス，マーシャル，ケインズなど著名な経済学者たちの書いた経済学の著作は，当然ながら，それ自身の固有の体系をもっている。どんな著作もそれ自身の体系なくしては，展開できないし，

*大妻女子大学

章構成もできない。その場合，より難しいか，あるいは最も難しい問題・命題から始めれば，自分自身も説明できず，自分自身も展開が困難になり，読者もまた理解できない。だから，どの経済学者も最初は最も簡単な問題または命題から始め，説明する。それが終わると，次に少しより複雑な問題・命題に入り，説明する。このようにして，だんだんより複雑な問題・命題に突き進んでいき，最後に最も複雑な問題・命題を解明して，展開を終わる。これが経済学の体系である。

経済学は経験科学であり，世の中の現実の経済現象を分析する。経済現象の部分だけを切り取って分析することも重要であるが，それでは部分理論に過ぎない。前述の偉大な経済学者たちは総体としての経済社会，例えば資本主義経済社会を分析する。しかし，資本主義経済といっても，複雑であり，こんがらがっており，混沌としている。たしかに部分的には，例えば，賃金，利潤，経営者利得，利子，地代，労働者，失業者，貧富の格差，格差社会は常識的に分かっている。しかし，これらの経済的な諸形態はどのような内的関連にあるのかは，混沌としており，常識的には分からない。そこでまず，この複雑に入りこんで混沌としている現実を徹底的に分析し，解きほぐさなければならない（下降分析）。その際，経済学では自然科学のように試薬も顕微鏡も役にたたず，「抽象力」だけが頼りになる。「経済的な諸形態の分析では，顕微鏡も化学的試薬も役にはたたない。抽象力がこの両方の代わりをしなければならない。」（KIS. 12〔『資本論』第Ⅰ部，全集版原頁，以下同様〕）

この「抽象力」は今まで余り注意が払われてこなかったが，経済学の方法にとって決定的に重要である。抽象（Abstraktion）とは，ある複雑なこんがらがった経済現象を分析し，そこからいろいろなより複雑なより具体的な諸要素を捨象しながら，同時により単純なより抽象的な核となるような要素を抽出することである。抽象はこの捨象と抽出との両方を含む用語である。この捨象と抽出とを同時に行って得られたものが「抽象的」であり，日本語でイメージする「具体性を欠き訳が分からない」という意味ではない。例えば，目の前の商品や貨幣は，資本に対してはより抽象的なものであるが，決して「具体性を欠き訳が分からない」ものではない。冒頭商品は，櫛田民蔵氏の言うような「論理的のフェクション」「歴史的ファクツ」「思想上の仮定又は哲学上のals-ob」[1]では決してなく，「論理的の事実」であって，現実に存在する商品であり，「歴史的ファクツ」とは何の関係もない。また，この商品の価値は，高畠素之氏の言うような「今日の経済制度における現実の市場関係より抽象せる真空界のもとに樹立された原則」[2]では決してなく，実在のものである。次に，より単純なより抽象的なものからより複雑なより具体的なものに順次接近していき，複雑な現実を頭脳の中で再生産する。この再生産は必ず体系をなす。これが経済学の方法である。代数学，幾何学，物理学，化学，生物学にしても，より単純なものからより複雑なものへと説明を深めていく。自然科学の方法も社会科学の1分野である経済学の方法も大筋では同じである。

以上は拙著『資本論の方法』（青木書店，1987年）の基本的考えである。本書に対して高橋順三郎氏は次の一連の労作で熱心な厳しい批判を展開された。「経済学における論理と歴史(1)—経済学の根本問題—」『光陵女子短大研究紀要 CROSS CULTURE』第10号，1992年（以下，「論理と歴史」と略称），「経済学の方法(1)(2)(3)（4完）—松石勝彦氏『資本論の方法』の検討—」『同誌』第11号，1993年，第13号，1995年，第17号，1999年，第19号，2001年（以下，(1)〜(4)と略称）。氏の批判点は，経済学の方法の根本に触れる重要問題であり，拙著で退けた旧通説の再論でもあり，本稿で詳しく回答する。

以上の高橋氏の5論文は，①上昇法と下降分析など経済学の方法に関する最初の4本の論文と，②冒頭商品の基本性格に関する最後の論文（（4完）），の2種類に大きく分けることができる。以下，①を第Ⅰ〜Ⅲ節で検討し，②を第Ⅳ節で検討する。

I　経済学の方法と上昇法

1　高橋氏による上昇法の否定

私と高橋氏との間の最大の争点は，「抽象的なものから具体的なものへと上昇する（aufsteigen，英語 rise）方法」（『経済学批判要綱』「序説　(3)経済学の方法」，MEGA，Ⅱ／1.1，S. 36，英語版 Penguin Book，p. 101），すなわち上昇法（上向法[3]）が経済学の方法として適切かどうか，にある。氏はこの上昇法を完全に否定される。氏は「論理と歴史」論文で冒頭から上の「序説　(3)経済学の方法」を検討され，次のように言われる。

引用 A—「そのような簡単なものから複雑なものに到る『第二の道』は『経済学の方法』としてははたして正しいものであろうか……。それが正しいものでないことは歴然としている。」（「論理と歴史」31－32頁）

つまり，上昇法が「経済学の方法」としては「正しいものでない」というのである。他方，私はこの上昇法が正しいと拙著『資本論の方法』で主張している。ここが私と高橋氏との決定的な対立点である。マルクスは「序説　(3)経済学の方法」の中で次のように言う。

「労働，分業，欲求，交換価値のような単純なものから，国家，諸国民の交換，そして世界市場にまで上昇していく（aufsteigen，英 ascend）経済学の体系が始まった。このあとの方が，明らかに科学的に（wissenschaftlich，英 scientifically）正しい方法である。」（S. 36，英 p. 100）

このような「科学的に正しい方法」である上昇法を私は拙著で経済学の方法として採用した。しかし，氏はこの「科学的に正しい方法」である上昇法を「正しいものでないことは歴然としている」（引用 A）と完全に否定される[4]。それではマルクスの経済学体系プラン[5]や『資本論』の篇別構成が説明できないだろう。

2　高橋氏の上昇法否定の根拠

高橋氏が上昇法つまり「第二の道」を否定される理由は，上昇法が科学一般の方法だという点である。

引用 B—「あるべき経済の方法としては，このような一般に妥当する科学の方法をもってしては決して十分とはいえず，それでは『与えられた一国を経済学的に考察』したことにならないのである。マルクスの考える『経済学の方法』は，以上の説明ののちに与えられることになる。」（「論理と歴史」32頁）

しかし，どうして「一般に妥当する科学の方法」が「経済学の方法」として「十分とはいえず」なのか。「はしがき」で述べたように，経済学も科学である以上，「経済学の方法」も「一般に妥当する科学の方法」である。より抽象的なものからより具体的なものへ，より単純なものからより複雑なものへ上昇する方法は，幾何学，解析学，化学，物理学，生物学でもそうである。近代経済学でも不十分ながらそうである。メンガーは，価値（限界効用価値）→貨幣へと上昇し，ジェボンスは，交換→労働→地代→資本へと上昇する。ワルラスは，限界効用に基づく交換→資本→蓄積→流通と貨幣→価格決定・独占・租税へと上昇する[6]。これらの展開が正しい展開となっているかは別として，一応は上昇法である。

引用 C—「この『上昇法』は，マルクスの（＝『資本論』の）方法というより，マルクス以前の一般に『科学的に正しい方法』というべきもので，それを踏まえて新しいマルクス独自の方法が『資本論』では取り入れられている」（(2)283頁）。

このように，上昇法を「マルクスの（＝『資本論』の）方法」ではないと否定され，「マルクス以前の一般に『科学的に正しい方法』」とし，「マルクス以前」に限定するのは問題である。18世紀の経済学者たち，例えばスミスは『国富論』，リカードは『経済学と課税の原理』の展開において，完全ではないが，上昇法を取っており，マルクス自身もこの上昇法を踏襲し，自らの経済学体系プランや『資本論』体系を展開したのである。氏もこのことを認め，「それ〔上昇法〕を踏まえて新しいマルクス独自の方法が『資本論』では取り入れられている」と言われる。「踏まえ」と言

う以上，古典派の上昇法が『資本論』の方法の基礎であり，採用されていることを認めることになる。それでは，そもそも上昇法は「正しいものではないことは歴然としている」（引用A）その上昇法を，『資本論』がどうやって「踏まえ」るのか，また上昇法を「マルクス以前」に限定したのに，いかにして「踏まえて」「マルクス独自の方法」に取り入れるのか？

3　高橋氏の積極説

それでは「マルクス以前の一般に『科学的に正しい方法』というべきもの……を踏まえて新しいマルクス独自の方法」とは何か。上昇法を否定される氏の正しい経済学の方法とは何か。

引用D—「経済学の篇別においては，ブルジョア社会で資本の支配的領域たる工業すなわち産業資本のとりわけ生産部面での特質が，まず第一に取り上げられねばならない……。この社会での分配・交換・消費は，この産業資本の生産の在り方によって規定され左右されるものだからである。そして，かかる選択において，論理的展開は直接関連をもつものではありえない。抽象的なものから具体的なものへの展開という一般に『科学的に正しい方法』とは独自の経済学の方法がここで展開されねばならないのである。／『資本論』全3巻の構成や各巻内部の篇別・章別構成は，以上見てきた『経済学の方法』に則って組み立てられている」（「論理と歴史」39頁）。

これが上昇法に代わる高橋積極説である。上昇法という「一般に『科学的に正しい方法』とは〔異なる〕独自の経済学の方法」すなわち「一般的に妥当する『正しい方法』とは異なる『方法』」（(1)294頁）とは，「工業」における「産業資本」の「生産部面」のことだというのである。しかし，これでは「経済学の篇別」や「『資本論』全3巻の構成や各巻内部の篇別・章別構成」は全然決まらない。例えば，「産業資本」の「生産部面」の篇別である絶対的剰余価値生産と相対的剰余価値生産，労働賃金，資本蓄積などの「篇別・章別構成」は決まらない。また「経済学の篇別」がどうして工業，産業資本，生産部面から始まらず，商品や貨幣から始まるのかも全然分からない。「資本を考察の中心に据え」るのは当然であり，だからこそ *Das Kapital* であるが，これは資本が「考察の中心」だということだけであり，その資本の篇別構成をどう規定するのか不明である。産業資本→商業資本→利子生み資本→地代生み資本→三大収入とその源泉　という篇別構成はどうやって決めるのかも不明である。

氏は，「序説」の「経済学の方法」の中の上昇法を言う部分と，その後の「諸範疇の順序は，近代ブルジョア社会で互いにもつ関係によって規定されている」と言う部分とは全く別のものであり，前者は18世紀の経済学体系や科学一般の「科学的に正しい方法」である上昇法であり，後者こそそれとは「異なる」「新しいマルクス独自の方法」である，と考えておられる。しかし，これら二つの部分は別のものではなく，ひと続きの論理的展開である。後者は歴史的展開を即経済学の諸範疇の展開とはできないと強調した部分であり，その「諸範疇の順序」はどうなるのかは具体的には何も言ってない。それはすでに先に上昇法を「科学的に正しい方法」＝経済学の方法であると明らかにしていたからである。

総じて，引用Dはなんら「経済学の篇別」を示していない。高橋氏は「『資本』が『出発点にも終点にもならねばならぬ』」（(2)294頁）と強調されるが，それだけでは『資本論』の篇別構成・論理的展開が全然説けたことにならない。

マルクスが「賃金労働や資本などは，交換，分業，価格などを前提している。例えば資本は賃金労働が無ければ無であり，価値，貨幣，価格などが無ければ，無である」（『要綱』S.36）と言うように，「産業資本」→「賃金労働」→「価値，貨幣，価格」と解きほぐしていって（下降分析），今度は逆にこれらの「より単純な諸概念」（同頁）である「価値，貨幣，価格」→「賃金労働」→「産業資本」へと上昇して叙述していく上昇法によってのみ編別構成が決まる。

Ⅱ　経済学の方法と下降分析

1　上昇法と下降分析

より抽象的なものからより具体的なものへと上昇する上昇法といっても，それに先立って具体的なものの分析がなければ，アプリオリに（先験的に）上昇できない。我々が新しい現代の問題を解明する時，この問題を論じる前にあんな問題があった，だからあんな問題を先に論じないと，この問題も説けない，といったことがよくある。上昇法を取るとしても，その前に全く混沌とした現実を徹底的に分析して，いろいろな諸要素・諸概念に分解し，さらにはある要素・概念Aがまだより抽象的な要素・概念Bを前提していることに気がつけば，さらにそのBを分析する，さらにもっとより抽象的な要素・概念Cを分析する……等々といった試行錯誤をまずもってするほかはない。これは下降分析である。そして，こうして得られたばらばらの諸要素・概念の内的関連を探し出す。最後に，内的関連が分かれば，より抽象的なものからより具体的なものへと整理し序列をつける。これが上昇法である。だから，下降分析は上昇法と同じである。言い換えると，分析は「研究」であり，上昇法は「叙述の仕方」である。『資本論』第Ⅰ部第2版の「あとがき」にこうある。

「叙述の仕方（Darstellungsweise）は，形式上，研究の仕方（Forschungsweise）とは区別されなければならない。研究は，素材を細部にわたってわがものとし，素材のいろいろな発展形態を分析し，これらの発展形態の内的なきずな（Band，紐帯）を探り出さなければならない。この仕事をすっかり済ませてから，初めて現実の運動をそれに応じて叙述することができる。」（KIS. 27）

前掲拙著『資本論の方法』30－31頁ですでに述べたように，このような素材とその発展形態の徹底した「分析」，それらの「内的なきずな」の探求が，私の言う分析であり，「研究の仕方」である。これが完了すると，初めて「現実の運動」を照応的に叙述できるのである。この「叙述の仕方」が上昇法である。

「序説」の「(3)　経済学の方法」で言われているように，17世紀の経済学者たちは「生きた全体」である人口，国民，国家などから始め，分析によって「分業，貨幣，価値などのようないくつかの規定的な抽象的一般的な諸関連」を見つけだして終わる（『要綱』S. 36）。例えば，ペティやスチュワート[7]は人口から始め，分業，労働，交換価値，貨幣などにたどりついている（『経済学批判』全集⑬S. 38－39参照）。しかし，スミスのような18世紀の経済学者たちは，先人の研究を受けて，労働，分業，交換価値のような単純なものから国家，諸国民間の交換，世界市場にまで上昇していく「経済学の諸体系」を展開した。この後の方法が明らかに「科学的に正しい方法」である。

もちろん，上述から分かるように，自分だけで現実そのものの分析を全てやるのでなく，先人のすでに現実を分析した業績の研究をやれば，遺産相続ができる。マルクスは自分で現実の分析をやるのと同時に先人の遺産の分析をやっている。例えば，スミスの『国富論』第1編第6章の「労働者たちが原料に付加する価値は二つの部分に分解する……賃金と利潤」（第5パラグラフ）を分析すれば，絶対的剰余価値生産が得られる。また，リカードの賃金－利潤相反説に基づいて，人口増→限界地耕作→小麦価格上昇→賃金上昇→利潤減少，という収穫逓減法則＝利潤率低下法則を分析して，それに産業革命やそれ以後の工業での技術革新による大幅な製品価格の低下の分析をかぶせれば，先の式は技術進歩→賃金財価格低下→剰余価値の相対的増大という逆の命題が成立し，相対的剰余価値の生産が得られる。しかし，この両者はどちらが先に説くべきかという問題がある。絶対的剰余価値の生産における付加価値の賃金と利潤への2分解がなければ，生活必需品の価格低下による賃金部分の相対的減少と利潤部分の相対的増大，つまり相対的剰余価値の生産が説けない。だから，絶対的剰余価値の生産→相対的剰余価値の生産という論理的展開となり，前者がより抽象的なもの，後者がより具体的なものになる。後者

が前者プラス技術革新・労働生産性上昇・賃金財の価格低下であるから，前者がより単純なもの，後者がより複雑なものである。前者が無ければ，後者も無い。

分析がなければ，各範疇・概念の摘出・措定もなく，またそれら相互の関連も分からず，どれがより抽象的・単純か，どれがより具体的・複雑か，も分からず，それゆえ抽象的なもの→具体的なものという上昇・論理的展開も無い。

2 『資本論』全三部に係わる下降分析

氏は，私が『資本論』第Ⅲ部→第Ⅱ部→第Ⅰ部の下降分析について書いた次の文言について，「当をえたものといえようか」((1)287頁）と批判される。

「資本主義的生産は現実具体的には総過程として存在し，資本はこの総過程において総運動G–W･･･P･･･W'–G'をとげ，そのなかで具体的諸形態をとる（『資本論』第Ⅲ部)。この資本の総運動を分析すれば，その一面として資本の流通過程（『資本論』第Ⅱ部）を抽象しうる。資本の流通もG–W･･･P･･･W'–G'という循環の反復であるからである。しかしさらにこの資本の流通過程を分析してみれば，その背後に資本の生産過程･･･P･･･があることがわかり，これを抽象しうる。資本の流通は資本の生産がなければ存在しない。」（拙著『資本論の方法』10頁）

これについて，氏は，第一に，「このような主張は，それ自体論理的にみて首をかしげざるをえまい」，「総過程を『分析』すれば当然のこととして資本の生産過程と資本の流通過程という『要素』が得られる」((1)287頁）と批判される。しかし，ただちに両要素のどちらがより抽象的で，先に論じるべきであるか，という問題が生じる。そこで，私は「資本の流通は資本の生産がなければ存在しない」と述べ，前者がより具体的・複雑なものとし，後者をより抽象的・単純なものとした。生産があくまで根源的であり抽象的であって，生産が無ければ，より具体的な流通は存在しない。「物品は，販売のために，つまり商品として生産されない限り，商品として流通に入ることができない」（KⅡS.39）のである。氏は「資本の生産過程は資本の流通過程がなければ存在しない」((2)288頁）と批判されるが，資本の生産過程は資本の流通過程が無くとも存在できる。その証拠に『資本論』第Ⅰ部「資本の生産過程」は「資本の流通過程」抜きで説かれている。ここに氏の流通過程についての誤解がある。項を改めて論じよう。

3 資本の流通過程とは何か

引用E—「資本の運動は，周知のようにG–W･･･P･･･W'–G'という過程をたどり，二つの流通過程と一つの生産過程から成り立っている。これらの運動はそれ自体とみれば各々独立した三つの運動であり，生産手段と労働力の購買という最初の流通過程は直接的生産過程とは分離されたそれ独自の運動である。またこの二つの生産要素の結合過程としての生産過程は上に見た購買という流通過程とは異なる資本の運動である。さらに，生産過程の成果たる生産物の販売という後の流通過程もやはり前二者と異なるそれ独自の運動であるといえよう。『資本の流通過程』を論じた『資本論』第2巻は，この生産過程を挟む二つの流通過程における独自の特徴＝法則を解明したものであり，その際には資本の生産過程は意識的に捨象されているのである。したがって，このような流通過程を『分析』しても『その背後に資本の生産過程があることがわか』るなどといえないのではあるまいか。それは丁度“水を分解すると水素と酸素と言う要素（元素）をとりだすことができるが，その背後に窒素という元素もあることがわかる”という議論に似てよう。購買と販売という流通過程での特徴がそれ自体として問題であり今それを論じている時に，『その背後に生産過程がある』というのは，水素と酸素という水の成分が問題である時に，これと直接関係のない元素を持ち出す議論にたとえることができる」((1)287－288頁)。

ここには，氏の「資本の流通過程」の誤解が露呈している。最初のG–Wは「生産手段と労働力の購買という最初の流通過程」であり，最後の

W'–G'は「生産過程の成果たる商品の販売という流通過程」であり，『資本論』第Ⅱ部は「この二つの流通過程における独自の特徴＝法則を解明したもの」であるというのは，完全な誤解である。このような販売と購買は，すでに『資本論』第Ⅰ部第1篇「商品と貨幣」で分析済みであり，『資本論』第Ⅱ部の「資本の流通過程」の固有の分析対象ではない。第Ⅱ部では商品の流通（販売と購買）ではなく，まさに「資本の流通（*Der Umlauf des Kapitals*）」（『資本論』第Ⅱ部第1稿第1章〔現行版第1篇〕表題，MEGA，Ⅱ／4.1，S.140）を取り扱う。第Ⅱ部第1篇「資本の諸変態と循環」では，G–WやW'–G'を販売と購買としてではなく，資本の諸変態や資本の循環の1局面として把握し，しかも生産過程･･･P･･･をも含めて資本変態・循環の1局面として全く新しく展開する。「資本の流通過程」を単なる商品の購買・販売だとすれば，資本の流通過程という本質を見失う。引用Eの「購買と販売という流通過程での特徴がそれ自体として問題であり今それを論じている時」は的外れであろう。また，第Ⅱ部「資本の流通過程」において，「資本の生産過程は意識的に捨象されている」のではなく，むしろ「意識的に」取り入れられている。第1篇「資本の諸変態と資本の循環」でも第2篇「資本の回転」でも第3篇「社会的総資本の再生産と流通」においても，･･･P･･･すなわち資本の生産過程は意識的に取り入れられている。第1篇の資本変態・循環論では，G–W･･･P･･･W'–G'を分析し，G–Wと･･･P･･･とW'–G'を，氏が言う「各々独立した三つの運動」ではなく，生産まで含めて連続した資本の変態の3段階と把握し，さらにはこれら3段階を円環の3点と把握し，どの点から出発するかに応じて，貨幣資本の循環，生産資本の循環，商品資本の循環として把握する。だから，第1篇でも，「総運動G–W･･･P･･･W'–G'」（KⅡS.56），「総循環」（同55），「総過程」（同S.58，107，108）である。「資本の流通過程」でも「総過程は生産過程と流通過程との統一として表される」（同S.106），「資本の循環過程は，流通と生産との統一であり，この両者を包括する」（同S.64）のである。

総過程は第2篇「資本の回転」でも同じである。回転は循環の反復だから，循環そのものが「総過程」であれば，循環の反復である回転はもちろん「総過程」である。第3篇「社会的総資本の再生産と流通」でも，「資本の再生産過程は，この直接的生産過程を包括するとともに，さらに本来の流通過程……をも包括する」（同S.351）。このことは拙著『マルクス経済学』青木書店，1990年，第6章ですでに明らかにしたので，そこに譲る。

以上の説明から，資本の流通過程は資本の生産過程をその内部に含むことは明白であり，したがって，前者から後者が抽象でき，前者を捨象して，それ自体としての資本の生産過程を剰余価値生産として分析できるのである。引用Eの最後の部分―「水を分解すると水素と酸素という要素（元素）を取り出すことができるが，その背後に窒素という元素もあることがわかる」―という例えも，完全な誤解である。窒素は私の説明の何に当たるのか。総過程＝資本の生産過程＋資本の流通過程を分析して，どうして第3の要素が出てくるのか。

4　『資本論』第Ⅱ部の「総過程」と第Ⅲ部の「総過程」との違い

以上述べたように，『資本論』第Ⅱ部は「総過程」であるが，第Ⅲ部も「総過程」である。そこで，高橋氏は次のように批判される。

松石は「この再生産はまさに生産過程と流通過程の統一である」と言うが，「われわれの耳朶にはまだ『第三部の資本主義的生産の総過程は両者（資本の生産過程と流通過程）の統一であり，最も具体的なものである』という氏の言葉が鳴りひびいている。つまり，『資本論』の第3巻も第2巻第3篇もともに『生産過程と流通過程の統一』を考察対象にしているのであろうか。それなら両者の関連はどうつかまえるべきなのか，という理論的難問にわれわれは遭遇せざるをえない」（(2) 295頁）。

しかし，同じ「総過程」でも，その観点，意味

が全く違う。第Ⅲ部では資本はその総過程G–W･･･P･･･W'–G'を通して運動し，いろいろな具体的諸形態（産業資本，商業資本，利子生み資本，地代生み資本）を取り，剰余価値もいろいろな具体的諸形態（利潤，平均利潤，利潤率低下，商業利潤，利子，地代）を取ることを問題にする。他方，前述のように，第Ⅱ部では「総過程」を「資本の流通」の観点から分析し，資本の変態・循環・回転・再生産を明らかにする。この点も前掲『マルクス経済学』第6章で述べたので，詳細はそこに譲る。同じ総過程であっても，分析視角が違うことが問題の核心である。

「なるほど生産過程と流通過程は総過程に対して抽象的なものと具体的なものとの関係にあるといえるが，前二者の間ではそのようなことは言えない。両者はいわば相互に前提し合うと同時に排除し合う関係にある。」((1)291頁)

ここでは第一に，「生産過程と流通過程は総過程に対して抽象的なものと具体的なものとの関係にあるといえる」と上昇法を認めておられるが，これは上昇法とは「異なる方法」((1)294頁）という氏の説と自己矛盾する。第二に，氏は『資本論』第Ⅲ部→『資本論』第Ⅱ・Ⅰ部までは認めるから，後は『資本論』第Ⅱ部と第Ⅰ部の関係のみが残るだけである。生産過程と流通過程は相互前提・相互排除の関係にあるとしても，両者の間に因果関係，叙述の順序があるはずである。資本の流通過程が資本の生産過程を含むが，後者は前者を含まないことはすでに述べたとおりである。

5 『資本論』第Ⅲ部の下降分析

第一に，「資本主義社会の三大階級—資本家，賃金労働者，土地所有者—……の経済的基礎は三大収入である。そこで，この具体的な三大収入を分析すれば，資本の利潤，労働賃金，地代の三者が抽象できる」（拙著『資本論の方法』11頁）について，氏は「三大階級がその収入として利潤や労賃や地代を得ていることはどんな子供でも知っている」と批判され，私の「分析」は意味が無い，この分析は本来的な松石のいう水の分析と違うと批判される（(2)284－285頁)。それでは，氏は次の一文をどう理解されるのか。

「これらの諸階級は，私が諸階級の基礎をなす諸要素，例えば，賃金労働，資本などを知らなければ，空語である。」(『要綱』S.36)

人口を構成する三大階級は誰でも知っているが，それらの「基礎をなす諸要素」は自明ではなく，「どんな子供でも知っている」ことではない。諸階級の分析によって初めて「賃金労働，資本」などが析出でき，それらを分析すれば，資本の利潤や労働賃金や地代という経済学的範疇がえられ，しかもばらばらの諸範疇ではなく，内的関連のある諸範疇であることを知る。子供は経験的に資本家が大きな収入を得て，リッチなことを知っているが，その根源が資本にあり，賃金労働から生じる資本の利潤にあることは知らない。子供は賃金労働者が貧乏で「働けど働けどわが暮らし楽にならず」であることを経験的に知っているが，それが資本に雇用される賃金労働，搾取のせいであることは知らない。子供は土地所有者が全然働かず毎日優雅に暮らしていることを経験的に知っているが，それが土地所有に起因する地代のせいであり，剰余価値の分配形態であることは知らない。『資本論』第Ⅲ部第7章「諸収入とそれらの諸源泉」の分析のとおり，三大階級の「諸収入」を「分析」すれば，「それらの諸源泉」すなわち「資本の利潤，労働賃金，地代の三者が抽象できる」のである。

第二に，「最も具体的な第6篇の地代を分析すれば，より抽象的な経済的諸形態を抽出しうる。地代の一形態である絶対地代は農業部門における価値と生産価格との差額としての超過利潤であり，差額地代は一般的生産価格と個別的生産価格との差額であるから，そこでこれらの二種類の超過利潤を分析すれば，第二篇の生産価格，平均利潤，市場価値と個別価値，競争などより抽象的な経済的諸形態を抽象することができる」（拙著『資本論の方法』11頁）について，氏は批判される。

「その絶対地代や差額地代をどう『分析』してみても，そこに，価値はともかく『生産価格』や『平均利潤』といった『より抽象的な経済的諸形

態』を『その構成要素』として取り出すことは不可能であろう。」((2)286頁)

マルクスは「序説」で「地代は資本がなければ，理解できない。しかし資本は地代なしでもよく理解できる」(『要綱』S.42) と言う。『資本論』第Ⅲ部は「資本主義的生産の総過程」の分析であるから，資本主義的農業の地代が取り扱われており，したがって，資本主義的農業資本家も平均利潤を得ないと，農業をやめる。だから，この農業資本家が土地所有者に支払う地代は，彼の平均利潤を超える超過利潤でしかありえない。この超過利潤はまずはリカードがすでに分析したように差額地代であり，リカードはそれを土地の肥沃度の差に基づく一般的価値（＝劣等限界地の個別価値）と個別価値との差額＝超過利潤とした。しかし，資本主義的農業でも平均利潤したがって生産価格が支配しており，そこでこのリカード差額地代説を一般的生産価格と個別的生産価格の差額＝超過利潤と再把握しなければならない。しかし，地代はこの差額地代だけでは済まない。土地の肥沃度と関係なく，土地を借りれば，何らかの地代を地主は農業資本家に要求する。これが絶対地代である。農業部面では資本構成が工業より低く，それゆえ生産価格が価値より低いから，価値と生産価格の差額＝超過利潤が発生し，これが絶対地代である。

したがって，超過利潤としての両地代を分析すれば，「生産価格，平均利潤，市場価値と個別価値，競争などより抽象的な経済的諸形態を抽象することができる」のである。

また，氏は次のように批判される。「この『三大収入』の中でなぜ『地代』が『最も具体的』なものなのかの説明は，どういうわけかここで一言半句もなされていない。……この『具体的な地代』と『資本の利潤』や『労働賃金』がどのように関連しているかも全然述べられていない。」((2)286－287頁) しかし，上の「第二に」で見たように，地代が産業資本の平均利潤・生産価格などを前提していることで十分説明できている。三位一体式の土地―地代，資本―利潤では，「地代は資本がなければ，理解できない」(前出) のであり，資本―利潤を前提しているから，地代がより具体的なもので，資本の利潤がより抽象的なものである。たしかに労働―賃金は抜けているが，後に拙著『資本論の方法』の続きの12頁で一応は説明しており，それゆえ賃金も入れて，「地代が最も具体的」である。少なくとも拙著の前後１頁ぐらいを入れて理解して頂かないと，あらゆることを一度に全部説明しなければならないことになり，不可能である。拙著のこの箇所は下降分析のみをごくごく簡単に述べた部分であり，これで地代，利潤，賃金の関連を全て述べろと言うのは全く「ないものねだり」である。

高橋氏は先述の「地代は資本なしに理解できない。しかし資本は地代なしでもよく理解できる」やその後の「資本はブルジョア社会の一切を支配する経済力である。資本が出発点とも終点ともならなければならず，そして，土地所有よりも前に展開されなければならない」を引用されて，私見を批判される。「ここでの説明は，『地代』が『最も具体的』か否かという説明とはまったく異なる『近代ブルジョア社会のなかでの経済的諸関係の編成』によって導き出される地代の位置である。」((2)287－288頁)

マルクスは「近代ブルジョア社会のなかでの経済的諸関係の編成」からすれば，地代が資本の分析の後で初めて理解できると言っているのである。ということは，地代がより具体的なもので，資本がより抽象的なものだということである。資本を明らかにして初めて地代は，前述の意味で説けるのであり，その意味では最も具体的なものである。このような経済学の体系がより抽象的なものからより具体的なものへと上昇することと「近代ブルジョア社会のなかでの経済的諸関係の編成」とは，全く矛盾せず，それどころかこの「編成」を明らかにすることが即上昇法である。氏が強調されるこの「編成」や，「地代は資本なしに理解できない。云々」によって，私に要求された前述の利潤と地代と労賃との関係をご自身説けるのだろうか？「氏が利潤や地代や労賃や地代をいかなる関連においてとらまえているのかなかなか理解しえない」((2)287頁) は氏自身にふりかかる

火の子でなかろうか。氏は，前述のように，上昇法を否定されるが，一体マルクスが「序説」で説いているいわゆる下降法つまり私の言う下降分析をも否定されるのか，あるいは認めるのか，はっきりして欲しい。

第三に，「他方，資本の利潤を分析すれば，利子や商業利潤や平均利潤を抽象しうる。利子もまた資本の果実である。具体的な第五篇の利子を分析すれば，より抽象的な産業利潤や商業利潤に源泉をもつことがわかり，これらに帰着させうる。第四篇の商業利潤を分析すれば，産業資本の平均利潤からの分与であることがわかり，平均利潤を抽象しうる。／かくて第五篇の利子→第四編の商業利潤→第二篇の平均利潤という具体的なものから抽象的なものの順序がきまる。」（拙著『資本論の方法』11頁）

これについて，氏は，この「説明にはさまざまな問題が錯綜して含まれている」((2)289頁）と言われ，まず，「『資本の利潤』とはいかなる種類の利潤なのであろうか？商業利潤や産業利潤を含めてのものか，それとも産業利潤のみをさすのであろうか？」（同頁）と疑問を出される。しかし，「資本の利潤」は，文脈上は拙著の同じ11頁の一つ前の第一パラグラフの三大階級の三大収入としての「資本の利潤，労働賃金，地代」の「資本の利潤」である。だから，この総括的表現の「資本」は，産業資本，商業資本，利子生み資本を含むことは自明であり，したがって「利潤」は産業利潤，商業利潤，利子を含むのは当然である。同じ11頁の続きのたった短い二つのパラグラフであるから，正確に理解して頂かないと，いたずらに「錯綜」して困る。

次に，私の文言—「利子を分析すれば，より抽象的な産業利潤や商業利潤に源泉をもつことがわかり，これらに帰着させうる」—について，高橋氏は「またしても恣意的な『分析』の用法」((2)290頁）だと批判される。しかし，果物の木が自然に果実をつけるように，資本が自然に利子を生むと見える「資本—利子」という全く無概念的な「利子を分析すれば」，利子は無概念的な利子生み資本の運動 G–G' の差額であるが，実はこの差額は産業資本や商業資本（G–W–G'）への貸付の結果であり，それゆえ利子生み資本の運動は G–G–W–G'–G' であることが初めて分かる。つまり利子生み資本の運動は，産業資本の運動と商業資本の運動を含むのである。だから，利子は産業利潤や商業利潤からの分与である。このような「利子の分析によって」，実は利子は産業利潤・商業利潤ΔGに「源泉をもつことがわかり，これらに帰着させうる」のである。利子生み資本の運動 G–G–W–G'–G' は，産業資本・商業資本の運動 G–W–G' をその内部に含み，それゆえ，利子生み資本の果実である利子も，概念的には産業利潤・商業利潤を含むのである。たしかに量的には利子は産業利潤・商業利潤ΔGより小さいが，概念的には産業利潤・商業利潤ΔGなしには理解できない。だから，高橋氏のように「利子をどんなに『分析』してみても，そこに『構成要素』として『商業利潤』や『産業利潤』は微塵も含まれていないことは明らかである」((2)290頁）とは言えない。ここに分析の効用，意義がある。

さらに，氏は「この『資本の利潤の分析』は『資本論』のどこでおこなわれている『分析』であろうか。……『資本の利潤』についてはなんの説明も与えられていない。……『利潤』はこの巻〔第Ⅲ巻〕の最初の三つの篇で説明されているという，氏にとってきわめて奇妙なことが『資本論』で展開されている」((2)290頁）と批判されるが，これについては以上で十分説明した。私は「資本の利潤を分析すれば，利子や商業利潤や平均利潤を抽象しうる」（拙著『資本論の方法』11頁）と述べ，「資本の利潤」は第6篇利子論，第5篇商業利潤論，第2篇平均利潤論で展開することを明示している。さらには「第7篇　収入と諸源泉→第6篇地代→第5篇利子生み資本→第4篇商業利潤→第3篇利潤率の低下法則→第2篇平均利潤→第1篇利潤」（同11－12頁）と述べ，第3篇や第1篇も入れて明らかにしている。だから，「『利潤』はこの巻〔第Ⅲ巻〕の最初の三つの篇で説明されているという，氏にとってきわめて奇妙なことが『資本論』で展開されている」と言われても，私にとって「奇妙」でも何でもない。

高橋氏は私の分析の用法が「恣意的」((2)286頁）だと批判されるが，一般的に言えば，分析は私のみの限定的な用語ではなくて，一般用語であり，多岐にわたって当然である。見田石介氏がかつて名著『資本論の方法』[8]において分析を強調されておられ，私も大いに影響受けた一人である。マルクスも「経済的諸形態の分析」（KⅠS.12），「商品の分析」（同S.11，49，85，184）「価値実体と価値量の分析」（同S.12），「労働の二重性格の分析。価値形態の分析」（同S.64，初版S.7），資本の分析，賃金の分析と言っており，これは私が「即時的な内的分析」（『資本論の方法』16頁）と便宜上呼んだものである。

6　『資本論』第Ⅱ部の下降分析

「『資本論』第Ⅱ部についてみよう。資本の流通過程を分析すれば，まず社会的総資本の再生産と流通（第3篇）が抽象しうる。この再生産はまさに生産過程と流通過程との統一であるからである。この再生産を分析すれば，再生産とは個別資本の回転のからみ合いであるから，その基底として第2篇の資本の回転が抽象できる。資本の回転は資本の循環の反復であるから，これを分析すれば，第1篇の資本の循環が抽象しうる。」（拙著『資本論の方法』12頁）

高橋氏はこの叙述について「なぜ最初に『資本の流通過程』が取り上げられるのかという説明は，与えられていない」((2)292頁）と批判される。しかし，私は拙著の第1章第1節第4項「下降分析と『資本論』全三部の構造」の冒頭で「資本の総運動を分析すれば，その一面として資本の流通過程（『資本論』第Ⅱ部）を抽象しうる」（10頁）とすでに説明済みだから，それを受けて上の私の叙述がある。

7　『資本論』第Ⅰ部の下降分析

「資本の生産過程は，具体的には再生産過程として存在し，蓄積過程でもある。この第七篇の蓄積過程を分析すれば，相対的過剰人口が『労働の需要供給の法則』（KⅠ668頁）に依存し，したがってまた『労働賃金の一般的運動』（KⅠ666頁）に依存することがわかり，労働賃金を抽象しうる。そこで具体的な第七篇の資本の蓄積過程→第六篇の労働賃金という具体的なものから抽象的なものへの下降順序がきまる。」（拙著『資本論の方法』12頁）

第一に，この文言について高橋氏は，「なぜ『資本の蓄積過程』が『具体的なもの』で『労働賃金』が『抽象的なもの』か」((2)296頁）と疑問を出される。「資本の蓄積過程」の課題は相対的過剰人口と貧困の二つであるが，相対的過剰人口は，c/v一定の蓄積→労働需要＞一定の労働供給→労働賃金上昇→蓄積鈍化→c/v高度化→一定の労働の供給曲線に対する労働の過剰→相対的過剰人口，という論理になっている[9]。まさにこの相対的過剰人口論に基づいて，賃金についても，相対的過剰人口→賃金下落→一定の範囲内での「賃金の一般的運動」が言える。つまり賃金は相対的過剰人口のもとでは一定水準以下に抑えられ，それゆえ剰余価値生産は保障されるのである。上の図式から分かるように，第7篇の相対的過剰人口論では労働賃金の変動がキーワードであり，したがって第6篇ではあらかじめ労働力の価値という本質―この仮定だけで剰余価値論は十分説ける―をその現象形態である労働賃金に転化する必要がある。第7篇の蓄積論は労働力の価値のままでは説けないのである。

私はかねがねから，『資本論』第Ⅰ部第6篇の労働賃金論が第3～5篇の剰余価値論の「継続」「補足」「完成」であるというローゼンベルグ説（『資本論注解』副島・宇高訳，①38頁，②423－424頁，426頁）やそれに従うわが国の有力な経済学者の説では，第6篇労働賃金論の固有の積極的意義が分からないのではないかという疑問を感じていた。第一に，プラン問題を研究した際，『資本論』第Ⅰ部第6篇の労働賃金は，マルクスのプランで言う労働賃金ではないかと気がついた。古典派のスミスやリカード，マルサス，マカロック，ミル親子などの労働賃金論は量的にも質的にもマルクスの第6篇の労働賃金論をかなり下回っており，古典派も三大階級とその経済的基礎である三大収入（労働賃金，利潤，地代）の分析であ

るから，マルクスの第6篇の労働賃金論も固有の労働賃金論である。第二に，第7篇蓄積論の過剰人口論の論証のつめをやっている時に，労働賃金の上昇下降運動がその論証にとって決定的に重要であって，もはや剰余価値レベルでは必要かつ十分な労働力の価値では対応できず，労働力の価値の労働の価格すなわち労働賃金への転化をその前に説き終えていないといけないと考えるに到った。なぜなら，蓄積論では資本構成一定の蓄積は労働賃金の上昇を必然的にもたらし，この賃金上昇が技術革新・機械の採用をもたらし，資本構成を高度化させ，相対的な労働需要の減退をもたらし，一定の労働供給の増加率の下では相対的過剰人口を形成するからである。かくて，第6篇賃金論は剰余価値の「継続」「補足」「完成」であるという説は一面的であり，蓄積論との重要な関連が抜けている，という結論に達した(10)。もちろん私も，一面では第6篇労働賃金が剰余価値論の「継続」「補足」「完成」であるということを認めるが，他面では第6篇労働賃金が積極的な独自の固有の労働賃金の展開であることを強調するのである。「継続」説では，第6篇は独立の篇であって，「労働力の価値または価格の労働賃金への転化」や労働賃金の現実的な2基本形態や労働賃金の国際的比較などの積極的意義は見失われるのではないか，と危惧するのである。したがって，私見が「顛倒した理解」((2)299頁)「思い込み」(同308頁）ではない。

高橋氏も論文(3)では上記ローゼンベルグ説に立っているが，余りにも剰余価値論にひきつけ過ぎた発想であり，それでは労働賃金篇の積極的意義はないのか。どうして「労働力の価値と労賃との関係を明らかにすることは，マルクスの剰余価値の解明と不可分の関係をなしている」（7頁）だけなのか。「労働力の価値と労賃との関係」を明らかにしなくとも，労働力の価値だけで十分に「剰余価値の解明」はできるではないか。第3～5篇の「剰余価値の解明」は労働力の価値だけで「完成」していないのか？完成していないとすれば，『資本論』第Ⅰ部第3～5篇は欠陥があり，不完全だということになる。どこが不完全なのか。「いわばメダルの表と裏ともいえるもの」（続き）と言われるが，何がメダルの「表」で何が「裏」なのか不明である。

マルクスは第6篇の労働賃金論で「労働力の価値の労働賃金〔労働の価格〕への転化」を遂行して，労働賃金が「労働の価格」であるとする古典派の労働賃金論の不合理を批判するのと同時に，自分自身も古典派と同じ「ブルジョア社会の表面」に入り込み，自分の固有の労働賃金論を展開する。第6篇冒頭の「ブルジョア社会の表面では，労働者の賃金は労働の価格として，すなわち一定量の労働に支払われる一定量の貨幣として現象する」（KIS. 557）はその宣言である。マルクスは，この現象が労働力の価値という本質の「現象形態」（KIS. 559，562，564）「転化形態」（同S. 561）であるとし，労働力の価値という本質の世界から労働賃金という現象の世界に突入し，古典派や俗流経済学者たちの労働賃金論を批判しながら，自分の労働賃金論を展開している。「第6篇　労働賃金」はどうして独立しており，第5篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」の中に入ってないのか。

高橋氏は「『労賃』という不合理な表現の批判を通して剰余価値論を補完し完成させたもの」（7頁）と述べ，労賃論を剰余価値論に還元する。これは何でも本質に還元すればこと足りるとする本質還元論であって，同じ論法を用いれば，貨幣論は商品論を「補完し完成させたもの」，相対的剰余価値論は絶対的剰余価値論を「補完し完成させたもの」となる。

8　上昇法について

高橋氏は論文(3)では上昇法をかなり認められるが，依然各所で批判を展開される。第一に，『資本論』第Ⅰ部の「第4篇『相対的剰余価値の生産』から第5篇〔絶対的および相対的剰余価値の生産〕への展開がはたして『上昇法』すなわち論理的展開といえるかどうか疑問」((3)6頁）について。第3篇「絶対的剰余価値の生産」における労働日の必要労働時間と剰余労働時間への分割に基づいて，初めて労働生産力の上昇を起因とする

必要労働時間の短縮による剰余労働時間の増大という第4篇「相対的剰余価値の生産」が展開できる。それゆえ，その相対的剰余価値生産の概念の中に労働日の必要労働時間と剰余労働時間への分割，したがって絶対的剰余価値の生産の概念を含んでおり，だから第4篇から第5篇への展開は上昇法である。第5篇では，生産的労働の「生産」を剰余価値の生産と再規定し，したがって物質的生産以外のサーヴィス生産も生産的労働と規定し[11]，また改めて絶対的剰余価値の生産を資本のもとへの労働の形式的包摂，相対的剰余価値の生産を実質的包摂と規定する[12]。さらには「第15章労働力の価値と剰余価値との量的変動」や「第16章　剰余価値率を表す種々の定式」を展開する。これらの問題は「絶対的および相対的剰余価値の生産」（第5篇表題）の高みに立って初めて展開可能である。

第二に，すでに論じたように，第5篇→第6篇の展開も第6篇→第7篇の展開も上昇法であるが，氏はこれを否定される。それは「第3・4・5・6篇を含んだ広義の剰余価値論」((3)7頁）という氏の誤解に基づく。しかし，氏は「第3・4・5・6篇を含んだ広義の剰余価値論と第7篇の資本蓄積論……は『上昇法』であり，さらに又資本蓄積論が剰余価値論（＝広義）から『発生』するという意味でも『上昇法』といいうる」((3)8頁）と言われる。こうなれば，後は第6篇の独自な位置と意義を認めれば，見解の相違が無くなる。

第三に，『資本論』第Ⅱ部については，高橋氏は，第1篇→第2篇が上昇，発生であると認め，第2篇→第3篇も上昇，論理的展開であると認められるが，第2篇→第3篇については「発生」は認められない（(3)9－10頁）。しかし，第2篇の資本の回転は個別資本の回転であり，この回転は，氏も主張されるように，G–WとW–G'で他の資本の回転と絡み合うから，ここから「社会的諸資本の再生産と流通」（第3篇）が必然的に発生するから，「発生」である。

第四に，『資本論』第Ⅲ部について，氏は，第1篇から第5篇までは松石の言うとおり上昇法であり，論理的展開であるが（(3)10頁），第6篇地代論はむしろ「第2篇との関連がヨリ強い」((3)13頁）のであり，第5篇利子論からの上昇ではない，と批判される。しかし，第1～3篇は産業資本の分析（展開）であり，第4篇は産業資本の販売と購買とを専門的に担う商業資本と商業利潤の分析であり，これは商業資本が産業資本から分派したことを示す。第5篇利子論は，前述したとおり，利子生み資本が，以上見た産業資本と商業資本に資本を貸し付けて，それらの資本の運動G–W–G'に加わり，その運動G–G–W–G'–G'を通して，利子G'–G＝ΔGを獲得することを分析する。だから，第5篇は第1～4篇を含み，凝縮しており，第5篇から第6篇地代論に上昇する。「地代は資本がなければ，理解できない」（『要綱』S.42）という場合の「資本」は産業資本，商業資本，利子生み資本であり，地代生み資本もこれらの三資本並みに当然平均利潤をあげなければならない。さもなければ，地代生み資本は農業部面を去り，工業や商業や金融部面に参入するだろう。また，地代生み資本は商業資本に農産物の販売を委託し，利子生み資本から融資を受ける。だから，地代は平均利潤を上回る超過利潤だとしても，総体で見れば，第5篇から第6篇地代論に上昇する。

Ⅲ　弁証法的方法・発生的方法について

高橋氏は，さらに拙著『資本論の方法』の第3章「『資本論』の弁証法的方法」や「発生史的方法」について批判を展開される。

第一に，氏は，商品→貨幣→資本の「変化・発展・移行」と，資本の生産過程→資本の流通過程→資本主義的生産の総過程の「変化・発展・移行」とは「本質的に異なる」((1)290頁）と批判される。つまり，商品→貨幣→資本が「抽象的なものから具体的なものへの変化・発展・上昇であり論理的展開である」((1)291頁）のに対して，「資本の生産過程が資本の流通過程にさらにはこの流通過程が総過程に『変化・発展・移行』するということは，生産過程の考察がいわば打ち切られて

流通過程へそしてさらに流通過程の考察が打ち切られて総過程へと『変化・発展・移行』していくものである」((2)291頁）というのである。

しかし，「資本の生産過程が資本の流通過程にさらにはこの流通過程が総過程に『変化・発展・移行』するということ」は，「生産過程の考察がいわば打ち切られて流通過程へそしてさらに流通過程の考察が打ち切られて総過程へと『変化・発展・移行』していく」こととは同じではない。「変化・発展・移行」は「打ち切られ」説と全く異なる。「変化」「発展」「移行」はいずれも連続的変化であり，内的関連を示す。他方，「打ち切られ」は論理的な断絶，無関連を意味する。資本の生産過程→資本の流通過程→資本主義的生産の総過程を商品→貨幣→資本と同じ「変化・発展・移行」を認める以上，ともに「論理的展開」である。

第二に，松石が弁証法的・発生史的方法を「事物の『発生，存在，発展，死滅』，『発生，死滅』をとらえる方法」と言うのに対して，氏は次のように批判される。

「商品は，それ自身『発生，存在，発展，死滅』することによって貨幣を生み出すというのであろうか？同様に貨幣も，『発生，存在，発展，死滅』により，資本を生み出すのだろうか？資本の生産過程→流通過程→総過程という『資本論』全3巻の展開は，各々の過程の『発生，存在，発展，死滅』によって次の過程へ移行するというのであろうか？このようなことが言えないことは明らかであろう。」((1)292頁。(3)6頁も参照)

しかし，これは氏の誤解である。マルクスは『資本論』第Ⅰ部「第2版後記」で自分の「弁証法的方法」をカウフマンが「好意的に述べた」とし，「社会的有機体の発生，存在，発展，消滅」を肯定的に引用している。私も前掲拙著『資本論の方法』では「社会的有機体」である資本主義経済に限定して述べている。

「『資本論』はまさに資本主義経済の『発生，存在，発展，死滅』を扱ったものであり，その意味で弁証法的である。具体的には，『発生』は第Ⅰ部第24章の『本源的蓄積』であり，『存在，発展』は全三部である。『死滅』は，直接的には『本源的蓄積』の第7節『資本主義的蓄積の歴史的傾向』と第Ⅲ部第15章「利潤率の低下法則の内的矛盾の展開であり，間接的には……『物神性論』，……『資本論』全三部である。」(64頁)

このように，私は特に「死滅」を含める場合は「社会的有機体」すなわち資本主義経済に狭く限定してきわめて限定的に言っているのであって，これを商品→貨幣→資本の展開，資本の生産過程→資本の流通過程→総過程の展開に拡張解釈されて批判されても困る。私が言っていないことで鬼の首でも取ったように言われても，責任は取れない。ましてや高橋氏が，人間に男と女があって，「今，弁証法的・発生的にすなわち『発生，存在，発展，死滅』という立場で男をみて，それをどんなに『分析』してみても，それ自身が『死滅』して女へ変わるということはありえない」((1)292頁）と批判されても，私はこんな馬鹿なことは言ってないと答えるほかない。私の説のどこにこんな考えを許す点があるのか，ぜひ論証して欲しい。

Ⅳ 単純商品生産と冒頭商品の資本主義的性格

1 単純商品生産について

高橋氏は論文(4)で『資本論』第Ⅰ部の冒頭商品が資本主義的商品と昔の単純商品生産の歴史的商品を含む商品であると主張され，その観点から前掲拙著『資本論の方法』の第2編「『資本論』の方法と冒頭商品の性格」における私の冒頭商品＝資本主義的商品説を批判される。氏の説は，一部の研究者の唱える説でもあり，私見はその批判であった。

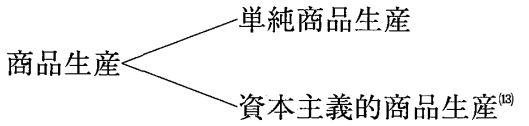
まず，私が『資本論の方法』において単純商品生産と言う場合は，歴史的な単純商品生産ではなく，あくまで資本主義的商品生産から抽象したものとしての論理的な単純商品生産である。氏が引用される次の文言で明らかである。

「以上，冒頭商品は資本主義的商品であることをみたが，したがって冒頭の単純商品生産はけっして歴史的な単純商品生産ではなく，資本主義的

商品生産の一要素としての商品生産である。」（拙著『資本論の方法』296頁）

たしかにエンゲルスは，『資本論』第Ⅲ部の「序文」で「マルクスは第Ⅰ部の冒頭では，彼が彼の歴史的前提としての単純商品生産から出発して次にさらにこの基礎から資本に到達する」（S.20）と述べ，また「『資本論』第Ⅲ部への補遺」では「単純商品生産」を紀元前6000年から15世紀に至るまでの歴史的なものとし，そこでは価値法則が「一般的に妥当する」とし，「単純商品生産の資本主義的商品生産への転化」（KⅢS.909）と言っている。しかし，これはゾンバルトの価値＝「思考的事実，論理的事実」（同S.903）説，シュミットの価値法則＝「仮説（Hypothese）」「擬制（Fiktion）」（同S.904）説に対する歴史的存在説による反論である。エンゲルスは，「もしマルクスが第Ⅲ部をもう一度手を入れることができたら，疑いもなくこの箇所をずっと詳しく論じたであろう」（同S.906）ということで歴史的存在説だけを「補遺」したのである。その「この箇所」とは，「諸商品の価値を単に理論的にだけでなく歴史的にも生産価格の先行者と見ることは全く適切である」（KⅢS.186）を中心とするマルクスのパラグラフである。だから，エンゲルスの「単純商品生産」や価値や価値法則が歴史的なものであって当然である。そういう観点に限定した「補遺」である。しかし，マルクスの上の文言にあるように，価値と生産価格の関係は「歴史的」だけではなく，「理論的」でもある。だから，私は，生産価格からの一抽象である価値と同じく，冒頭商品の背景にある資本主義的生産からの一抽象が論理的な「単純商品生産」としたのである。エンゲルスが「単純商品生産」を歴史的なものとしているからとて，これに限るという必要は全くない。

ところが，氏は，論文(4)の3頁で「三つの商品生産は次のように図示しうる」とし，



という図を書き，これによって「松石氏の文章の混乱ぐあいがヨリ明瞭となってくる」（同頁），「『単純商品生産は資本主義的商品生産の一要素』とは決して言えない」（同頁）と批判される。しかし，これは単純商品生産＝歴史上の単純商品生産とする氏の見解からする批判に過ぎず，私は『資本論の方法』ではこのような見解を批判したのであるから，私の見解そのものを内在的に批判しないと，批判になりえない。

私は「資本主義的生産はなによりも商品生産である」（拙著『資本論の方法』296頁）と明言しており，商品生産を資本主義的商品生産の一要素，一抽象であることを明確にしている。「商品生産は，生産の正常な支配的な性格としては資本主義的基礎の上で初めて現れる」（KⅡS.39）と言う場合の「商品生産」である。

私は「商品生産は資本主義的生産の一般的形態である」（KⅡS.490）というマルクスの言を引用して，続けて次のように言っている。

「このように，商品生産と資本主義的生産の関係は，前者が後者の『一般的形態』であることである。だから，『資本論』冒頭ではまずこの『資本主義的生産の一般的形態』である商品生産を考察し，ついでこれを基礎・前提にして，それの特殊形態としての資本主義的生産を明らかにするのである。」（拙著『資本論の方法』297頁）

これに対して氏は，「マルクスのいう『一般的形態』としての『商品生産』と，氏のいう『一般的形態』としての『商品生産』とは明らかに異なる。マルクスの場合は，資本主義的生産にも〔歴史的な〕単純商品生産にも共通する要素として取り出された『商品生産』であるが，松石氏の場合は，『単なる「商品生産」』＝『単純商品生産』としてのそれである」（(4)4頁）と批判される。

しかし，マルクスのこの一文―「商品生産は資本主義的生産の一般的形態である」―中の「商品生産」は，どこから見ても「資本主義的生産にも〔歴史的な〕単純商品生産にも共通する」とはとても読めず，「資本主義的生産の」という限定を氏は完全に無視しておられる。この一文は有名な「恐慌の可能性」を述べた文言（KⅡS.490－491）の中にあり，そこからしてもこの場合の商

品生産は資本主義的商品生産に限定され，歴史的な単純商品生産が入る余地は全くなく，共通説が成立する可能性はゼロである。

「商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転変」(『資本論』第Ⅰ部第22章第1節表題一部) と言う場合の「転変」は，すでに前掲拙著『資本論の方法』第11章第4節で見たように，歴史的転変ではなく，論理的転変である。だから，この場合の「商品生産」は高橋氏の図の歴史的な「単純商品生産」を含まず，資本主義的生産から抽象した商品生産であり，図は崩壊する。

2 冒頭商品は資本主義的商品か，あるいは単純商品か

先の図から「生産」を取り払うと，冒頭商品は歴史的な単純商品と資本主義的商品の両者を必ず含むということに帰着する。したがって，冒頭商品は「生産関係等においてまったく異なる二つの範疇」((4) 4頁) であることになる。この共通説は河上肇氏が最後にたどり着いた「商品としての商品」説であり，『資本論』第Ⅰ部第1篇「商品と貨幣」は「商品生産の社会一般に，即ち単なる商品生産の社会ならびに資本家的商品生産の社会に，共通の規定である」[14]という説である。この説についてはすでに拙著『資本論の方法』210－212頁で検討したので，参照して頂くこととし，以下，高橋氏の冒頭商品＝歴史上の単純商品プラス資本主義的商品説の問題点を簡単に見る。

第一に，私は拙著『資本論の方法』の第5章「マルクスの冒頭商品＝資本主義的商品説」において，資本主義的商品説の根拠となるマルクスの文言を『資本論』第Ⅰ部第1章から引用し，分析し，資本主義的商品説を論証している。それに対して氏はこれらの文言を逐次的に検討し，反論されている ((4) 8 －17頁)。これらの反論は私にはとても説得的とも思えず，こじつけとさえ思えるが，それは第三者の判定に任せることにして，私が最も重要視した次の『資本論』第Ⅰ部の冒頭文言をなぜ高橋氏は完全に無視されたのか，どうして反論されないのか，最大の疑問である。反論不可能だから，無視したと疑いをもたざるを得ない。

「資本主義的生産様式が支配する社会の富は，一つの『巨大な商品の集まり』として現れ，その個々の商品はこの社会の富の要素形態として現れる。だから，われわれの研究は商品の分析でもって始まる。」

ここでは，「資本主義的生産様式が支配する社会の富」は「巨大な商品の集まり」であり，その集まりの一つひとつの商品は資本主義社会の富の「要素形態」をなし，それゆえわれわれの研究はその商品でもって始まる，というのである。この文脈からして冒頭商品は資本主義的商品であることは明白である。私の冒頭商品＝資本主義的商品説の最大根拠はこの明白な冒頭文言にある[15]。

「われわれは資本主義的生産の最も単純な要素としての商品から出発する。だが，他方では，資本主義的生産の生産物，その結果が商品である。それの要素として現れるものが，後にはそれ自身の生産物として現れる。」(『剰余価値学説史』第3巻，『全集』26Ⅲ，S. 10，MEGA，Ⅱ／3．4，S. 1302)

ここでも冒頭商品が資本主義的商品であることは明白である。これらの文言は単純明快で，どこに歴史的な単純商品が入り込む余地があるのか？「資本主義的生産の最も単純な要素としての商品」こそ，私が言う単純商品であり，その論理的に抽象した単純商品を生産するのが単純商品生産である。このような単純商品は歴史的な単純商品でありえないし，またそれを含まない。そもそも資本を分析する『資本論 (Das Kapital)』がノアの洪水以来存在した大昔の歴史的単純商品をなぜ含み，分析しているのか？

『資本論』第Ⅰ部の第1版序文の中の次の一文も同様に冒頭商品が資本主義的商品であることを明白に物語っている。

「経済的諸形態の分析では，顕微鏡も化学試薬も役にたたない。抽象力がこの両者の代わりをしなければならない。しかし，ブルジョア社会にとっては，労働生産物の商品形態または商品の価値形態が経済的細胞形態である。」(KIS. 11－12)

ここではまず，「経済的諸形態の分析」では役にたたない「顕微鏡」や「化学試薬」が100%現在時点のものである点に注目すべきである。われわれは顕微鏡をのぞいて，例えば皮膚の「要素形態」（前掲冒頭文言）つまり「最も単純な要素」である「細胞形態」を分析析出する。また，化学試薬を使ってある食品にダイオキシンが含まれているかどうかを分析する。この顕微鏡や化学試薬による分析は，あくまで現在時点のことであって，昔に遡ることは絶対に不可能である。したがって，両者の代わりをする「抽象力」もまた現在時点のことである。現実の「経済的諸形態」を「抽象力」でもってより複雑なものを捨象しながら「最も単純な要素」「経済的細胞形態」を抽出していくと，「ブルジョア社会」における「労働生産物の商品形態または商品の価値形態」という「経済的細胞形態」を抽出できるのである。この「抽象力」は顕微鏡や化学試薬と同じく現在時点のことである。過去に遡るのは抽象ではない。抽象はあくまで現在時点の論理操作である。

これらの引用文言では「資本主義的生産様式が支配する社会」「ブルジョア社会」と明言されており，この引用文言を含むパラグラフの出だしで言われここの主題をなす「商品の分析」（KIS. 11）が「ブルジョア社会」の「商品の分析」であることは明白である。また，「労働生産物の商品形態」という場合の商品が「ブルジョア社会」の商品であることは明白である。したがって，冒頭商品は資本主義的商品である。

第二に，私のように歴史的展開を排し，純粋に論理的展開説をとれば，出発点の商品は事実上の資本主義的商品とするほかはなく，昔の歴史的な単純商品は入り込む余地は無い。しかし，高橋氏のように，冒頭商品に昔の歴史的な単純商品までを含めると，商品→貨幣→資本の展開の中のどこかで，昔の歴史的な単純商品を振り落として清算し，資本主義的商品に歴史的転換を遂げなければならない羽目に陥る。さもないと，最後に資本にたどり着かない。同じく商品→貨幣→資本の展開の中のどこかで，昔の歴史的な単純商品生産をふり落としてしまって，資本主義生産に歴史的転化を遂げなければならない羽目に陥る。さもないと，最後に資本に到着しない。非資本主義的単純生産で生産された非資本主義的商品を含む商品→貨幣→資本のどこかで資本主義に転化するという論理理的ジレンマに陥らざるを得ない。どこかで歴史的な単純商品や歴史的な単純商品生産を資本主義的商品や資本主義的商品生産に純化しなければならぬことになる。

この陥穽に陥ったのが河上肇氏である。氏は『資本論』第Ⅰ部第1篇「商品と貨幣」では歴史的な「単なる商品」が取り扱われ，第2篇第4章「貨幣の資本の転化」で初めて「単なる商品の世界を見棄てて資本家的生産の世界に這入」[16]ると言われる。宇野弘蔵氏も冒頭商品を同様に昔の商品まで含む「流通形態」とする。拙著『資本論の方法』第9章第4節ですでに述べたように，宇野氏は冒頭商品はどの生産様式のもとでつくられたか分からない空中にふわっと浮いているような「流通形態」であるとされる。しかし，剰余価値生産を説くときは，資本主義的生産に転換しなければならない。これは冒頭商品＝流通形態説から必然的に生じる自己矛盾である。宇野弘蔵氏は，『資本論』第Ⅰ部第4章に相当する「貨幣の資本への転化」において歴史的な商人資本→高利資本→産業資本の歴史的転化を説いて，ここで古い非資本主義的な歴史的痕跡を振り払い，産業資本したがって資本主義に初めて入るというような歴史的転換を敢行する。つまり，「純化」するわけである。しかし，この歴史的転化説は「貨幣の資本への転化」をなんら説いたことにはならず，ここで論理的に破綻している。貨幣と資本が論理的に断絶するからである[17]。同じ貨幣がW–G–Wと並んでわれわれの目の前に存在するG–W–G'という「流通形態」（これこそ真の流通形態であり，先の宇野氏の「流通形態」は誤用）を現在時点で展開しており，その場合Gは単なる貨幣ではなく資本である。これが貨幣の資本への転化，すなわち貨幣から資本への論理的展開であり，歴史的要素は全然入らない。

高橋氏の歴史的単純商品と資本主義的商品とを含む商品共通説，それに先の図の歴史的単純商品

生産と資本主義的生産とを含む商品生産共通説も，河上氏や宇野氏が陥った同じ陥穽に陥っている。ぜひ高橋氏もどこでこの歴史的単純商品・単純生産の痕跡を払い落とすのか説明して欲しい。そこまで考えないと，冒頭商品＝昔の歴史的単純商品プラス資本主義的商品という「共通商品」説は取れない。

私たちは資本主義社会に住んでおり，目の前にある資本主義社会の富の一要素形態である資本主義的商品をとりあげ，それを分析するのであって，どうしてこの商品に大昔の歴史的商品が紛れ込むのか。資本主義的商品からさしあたりまだ未分析の「資本主義的」を論理的に捨象し，単純商品を抽出するが，しかし大昔にタイムトンネルをくぐってスリップするわけではない。抽象はあくまで現在時点で行われる論理的操作である。

高橋氏は，「店頭に並べられた電化製品が事実的に資本主義的商品であるとしても，論理的展開においては，その『資本主義的』という規定を一たん取り外しヨリ簡単な関係を示す商品を想定する」((4) 6 頁）と言われるが，この「ヨリ簡単な関係」は昔の歴史的な単純商品生産関係を含む前出の「生産関係等においてまったく異なる」関係のことであろう。しかし，「電化製品」は現代にしか存在せず，歴史的な単純商品では絶対にありえない。氏のあげる例が高橋共通説を否定する。店頭に並ぶ電化製品は100%純粋の資本主義的商品であり，資本主義的社会の富の一要素形態であるが，冒頭で資本主義的とか資本主義的社会とは何かを一度に全て説明できないから，後で説明することにして，さしあたり資本主義的を論理的に抽象して，「商品の分析」に入るが，そうするからとて，冒頭商品が昔の歴史的な単純商品まで含みえない。私たちの分析対象は目の前の資本主義であり，その細胞形態としての商品をまず分析する。大昔の商品はどうでもいいのである。むしろ人間の解剖（資本主義的商品の分析）が猿の解剖（大昔の商品の分析）に役立つ。

氏は「資本主義的商品」から「『資本主義的』という規定をとり去った（＝捨象した）『商品生産』すなわち『単純商品生産』ととらえるべきではないかと考える」((4)17頁）と言われるが，これは「とり去った」「捨象」と抽象との意味の取り違えである。単に「とり去る（＝捨象)」であれば，資本主義的商品から資本主義的を捨象すれば，たしかにその商品は歴史的な単純商品生産のもとでつくられた歴史的な単純商品となろう。しかし，「とり去る（＝捨象)」は抽象とは違う。だから，私は「抽象」という厳密な用語のみを使っている。抽象は同一時限の論理的な同時的捨象と抽出を意味する。抽象はあくまで頭の中の論理的操作である。店頭の電化製品，例えばデジカメという具体的な資本主義的商品から「資本主義的」を捨象し「資本主義的」の規定の無い単純商品を抽出するとしても，この抽象はあくまで頭の中の論理的操作に過ぎず，この単純商品は依然として目の前の電化製品デジカメであり，デジカメという事実には変わりない。電化製品をさしあたり今は単なる商品として見ているだけであり，昔の歴史的な単純商品が紛れ込む余地は全くない。抽象はあくまで現在時点の論理的操作であり，時空を越えて昔の歴史的な単純商品に飛ぶわけではなく，昔とは全く関係ない。もちろん，この単純商品デジカメを分析した結果が昔の単純商品に準用できるが，あくまで準用に過ぎず，主ではない。資本主義的商品の分析が資本主義以前の商品の分析にも準用できるということが，問題の核心ではなく，資本主義社会の商品はどういう商品かを解明することが核心である。この準用はできてもできなくてもどうでも良い問題である。

(1) 櫛田民蔵「資本論劈頭の文句とマルクスの価値法則」『我等』1926年 6 月号，『櫛田民蔵全集』第 2 巻『価値及貨幣』改造社，1925年，1947年再版，第 5 章に所収，173頁。

(2) 高畠素之「マルクス価値論の『矛盾』」—山川均對小泉信三氏の論戦を背景にして—」『開放』1922年10月号，25頁。

(3) 授業で上向法と言うと，学生は理解できないし，またパソコンの変換でも出ない。経済学も特殊な言葉を使うより，一般で使う言葉を使うべきであると考え，普通の上昇法を使

う。

(4) この点について高橋氏は，「松石勝彦氏の『経済学の方法再論』への返信(1)」(*Cross Culture*，第22号，2006年）の中で松石の「誤解」(40頁）だと言われる。しかし，引用Aでは「それ（上昇法）が正しいものでないものでないことは歴然としている」と明言しておられるので，「誤解」のしようがない。また，「マルクスの経済学を上昇法という“一丁の鋏”で裁断する事は出来ず，それ以外の要素（＝方法）も考慮」(同頁）すべきとも言われるが，それなら上の明言をまず撤回すべきであり，また「それ以外の要素（＝方法)」とは何かを明示して欲しい。

(5) 拙著『資本論の基本性格』大月書店，1985年を参照。

(6) Carl Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaftlehre*, 1871, 安井琢磨訳『国民経済学原理』日本評論社，1937年，八木紀一郎，中村友太，中島芳郎訳『一般理論経済学』(1922年の第2版の訳)，全2巻，みすず書房，1982－1984年。William Stanley Jevons, *The Theory of Political Economy*, 1871, 小泉信三，寺尾琢磨，永田清，寺尾琢磨改訳『経済学の原理』日本経済評論社，1981年。Léon Walras, *Éléments D'Économie Politique Pure*, 1891, reprinted 1952, 久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店，1983年。

(7) William Petty, *Political Arithmetick, or a Discourse*, 1690, 大内兵衛，松川七郎訳『政治算術』岩波文庫，1955年，Steuart, Bart, *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, 2 vols, 1767, reprinted c1993, Dusseldorf, 中野正訳『経済学原理』岩波文庫，全3冊，1967－80年。

(8) 見田石介『資本論の方法』弘文堂，1963年，『見田石介著作集』第四巻，大月書店，1977年に所収。

(9) 拙著『資本論研究』三嶺書房，1983年，第4章，拙著『新版　現代経済学入門』青木書店，2002年，228－233頁。

(10) 詳しくは拙著『マルクス経済学』青木書店，1990年，第3章「労働賃金」，前掲拙著『新版　現代経済学入門』第7章第1項「労働賃金とはなにか」を参照。

(11) その意味ではサーヴィス労働を不生産的労働とする通説は疑問である。いずれ別稿で詳論する。

(12) 拙著『資本論と産業革命』青木書店，近刊予定，の第3章で詳しく論じたので，参照されたい。

(13) この見解は，二葉大三氏の「商品生産は資本制生産前の時期と資本制生産の時期とに区分され」(「労働価値説の一辯護—小泉教授の『マルクスの価値学説に對する一批評』を難じ高畠氏の批評に及ぶ」—『我等』第5巻第3号，1923年，12頁）るという説と同じである。

(14) 河上肇「マルクスの価値論に対する小泉教授の批評の批評」『社会問題研究』1925年5月，第62冊，13－14頁，『河上肇全集』岩波書店，第14巻，1983年に所収，178頁。

(15) 櫛田民蔵氏はこの冒頭文言の「要素形態」について，資本家的商品の特徴である「大量」が抽象されているから，「資本家以前の，所謂単なる商品生産時代の商品」であると主張される（「学説の矛盾と事実の矛盾—小泉信三氏のマルクス評—」『改造』1925年6月号，前掲書，第4章に所収，154頁)。しかし，この「要素形態」は「抽象」ではなく，単に資本主義的社会の富の「要素」であるに過ぎない。また「抽象」が過去に遡る歴史的操作ではなく，現在時点の論理的操作である。河上肇氏も，資本家的商品と誤解されるのは「資本論の表現上の一欠点」で，「吾々の研究は先ず単なる商品の研究から始まる」と訂正すべきであると主張される（「マルクスの労働価値説（小泉教授の之に対する批評について)」『社会問題研究』1922年11－12月，第39冊，5頁，『河上肇全集』第12巻，1982年に所収，360頁)。

⑯ 河上肇，同上「マルクスの労働価値説」，8頁，『河上肇全集』第12巻，361頁。

⑰ 前掲拙著『マルクス経済学』の「第2章 貨幣の資本への転化—宇野理論の内在的問題点を中心に—」を参照。

The Method of Political Economy
: A Reply to Prof. J. Takahashi's Criticism of my Book *The Method of "Capital"*

MATSUISHI KATSUHIKO
School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

The method of political economy is the same with other social sciences and natural sciences. At first, we analyze a complex realty and dissolve it into various elements to seek the inner relationships between them (descending analysis or the method of scrutiny). Secondly we ascend from more abstract and simpler to more concrete and more complex, and lastly reproduce in our brains the complex realty from which we have started (the method of description). This method I have elucidated along "Capital" in my book titled *The Method of "Capital"* published by Aoki–Shoten in 1987. Against this book Prof. Takahashi has developed his detailed and enthusiastic criticism in five successive papers. In them are included important problems on the fundamentals of political economy and the repeated popular views against which I had submitted alternatives consciously in my book. In this paper I do criticism of his criticism and at the same time, I try positive development of problems involved.

Firstly, I clarify that his positive view in place of my ascending method by emphasizing the production process of industrial capital is not enough to make clear the order and sequences of categories of political economy now in question and consequently the ascending method is inevitable even for his claims. Secondly, I argue that his criticisms of my descending analysis are due to his misunderstandings on the circulating process of capital and the capitalist process as a whole. Thirdly, I criticize his criticism that my view of the dialectical method of 'genesis, existence, development and extinction' is not applicable to the development of 'commodity→money→capital' is his misunderstanding of my limitation the theme only to capitalism. For that arrow (→) development, I had submitted my alternative dialectic method of 'genesis, development and transition' which he ignored. Fourthly, his criticism against my view that the commodities at the start are capitalist commodities is based on his own idea of the commodities at the start being both capitalist commodities and past historical simple commodities. But since commodities at the start are elements of the wealth of the capitalist society, they can not include historical simple commodities. For one thing, a digital camera now on display at a shop is surely a capitalist commodity which never existed in the past. What we do is just to abstract the capitalist nature from the digital camera and to think it as a simple commodity, as we can not analyze the whole thing at once at the same time from the start. But this does not necessarily render the camera to a past historical simple commodity. This abstraction is

only a logical treatment, and the digital camera still remains a capitalist commodity.

Key Words（キーワード）

Complex Reality（複雑な現実），Analysis（分析），Ascending Method（上昇法），abstract（抽象する），Dialectics（弁証法），Commoditiy at Start（冒頭商品），Simple Commoditiy（単純商品），Historical Simple Commodity（歴史的単純商品）